

1 はじめに

2018年は附属天文台にとって歴史的な変革・発展の年となりました。

まず4月に京大理学研究科附属天文台にとって第3の天文台となる岡山天文台が発足しました。前年から岡山に着任していた木野勝助教に加えて、新たな職員が着任しました：大塚雅昭特定助教、黒田大介特定助教、松林和也特定助教、戸田博之教務補佐員の4名です。

一方、前年の2017年10月～12月に完成間近の岡山天文台3.8 m望遠鏡の愛称募集を全国に発信したところ、1000通余りの応募が寄せられました。選考委員会で慎重に審議した結果、その中から「せいめい」が選ばれました(2018年3月)。これはひとつには1000年ほど昔に岡山天文台の近くの阿部山で天体観測をしたとの言い伝えのある陰陽師(天文博士)・安倍晴明(せいめい)にちなむものですが、3.8 m望遠鏡は太陽系外惑星の観測で活躍が期待されていることから、宇宙の生命(せいめい)の発見のさきがけとなる、という意味も込められています。選考委員会には次の方々が参加くださいました：藤原洋(委員長)、栗山康彦(浅口市長)、武井道忠(矢掛町副町長、町長代理)、中野留美(浅口市教育長)、泉浦秀行(国立天文台岡山天体物理観測所長)、栗田光樹夫(京大宇宙物理学教室准教授)、柴田一成(天文台長)。お忙しい中、岡山天文台での選考委員会に参加し審議して下さった委員のみなさまに感謝申し上げます。

そしてついに、2018年7月末、3.8 mせいめい望遠鏡は完成しました。計画のアイデアから20年あまり、実際の技術開発のスタートから10年以上経っていました。日本初の分割鏡、世界最軽量架台、世界トップレベルの研削加工技術の開発による鏡の自主製作、などの特色を持つ、純国産のすごい望遠鏡です。リーダーの長田哲也教授をはじめとする望遠鏡開発チームのみなさんの頑張りには本当に頭が下がります。当初7月末に予定していた完成記念式典は、西日本豪雨による被害のため、翌年2月に延期せざるを得ませんでした。せいめい望遠鏡そのものは予定通り完成しましたので、8月17日に3.8 mせいめい望遠鏡完成の記者会見を開きました。豪雨による水害で大変な被害に遭われた地元のみなさんを元気づけるニュースとして多くのメディアで報道されたのは、大変うれしいことでした。

2018年11月16日には飛騨天文台創立50周年記念式典を高山市内のホテルで開催しました。飛騨天文台道路も豪雨によって大きな被害を受けたため記念式典参加者の天文台見学ができなくなりましたが、記念式典そのものは78名の参加者のもとに盛大に開かれました。とりわけ、ゲストの方々による心温まる激励のスピーチには、飛騨天文台関係者一同、感激につぐ感激でした。

花山天文台については、元京大総長の尾池和夫先生が音頭を取ってくださって「花山天文台の将来を考える会」が前年に発足、10月には喜多郎さんによる第6回花山天文台応援野外コンサートなどもあって、市民のみなさんの応援で何とか存続にむけて走り出したところでしたが、12月に香川県高松のクレーンの世界的企業、株式会社タダノ(多田野宏一社長)から、毎年の花山天文台運営費1000万円を10年間ご寄付いただけるというお申し出を受けました。これにより、花山天文台の今後10年間の存続が確実になり、花山天文台関係者一同、大感激でした。なお、この寄付金を基金として、「花山宇宙文化財団」(設立者多田野宏一、理事長尾池和夫)が設立され(2019年4月)、今後財団が花山天文台を応援していく予定となっています。多田野宏一さん、尾池和夫先生をはじめとする財団およ

び将来の会の関係者のみなさんには、心より感謝申し上げます。

本来ならば、2018年に私は台長職を長田教授か一本教授にバトンタッチするはずでしたが、二人とも他の要件で引き受けられず、私が一年継続することになり、その結果、2019年3月末で台長を一本潔教授に引き継ぐこととなりました。附属天文台台長は2004年から15年もの長い間、続けたこととなります。これまで本当に多くの皆様方から、附属天文台に対し、暖かいご支援やご協力をいただきました。また、天文台の教職員や歴代の院生学生のみなさんも、天文台の維持運営や研究教育のみならずアウトリーチ活動まで含めて、献身的な協力をしていただきました。改めてお礼申し上げますとともに、附属天文台と一本潔次期台長へのご支援ご協力、今後ともよろしくお願い申し上げます。

令和2年(2020年)1月13日

京都大学大学院理学研究科

附属天文台

前台長(2019年3月末、退任) 柴田一成

2019年4月より柴田一成前台長からバトンを受けて附属天文台長に就任しました。柴田前台長は15年という長い在任の間、多くの面で附属天文台の発展に取り組んでこられました。中でも十数年の歳月をかけて開発をすすめてきた「せいめい望遠鏡」が2018年に完成をみて、岡山天文台が創設されたことは、附属天文台にとって数十年に一度の大きな変革だと言えます。太陽観測においては2010年に飛騨天文台のフレアモニター望遠鏡をペルーのイカ大学に移設し、世界太陽観測ネットワーク構想を推進するとともに、ペルーグループとの協力関係を築かれました。さらに、附属天文台、とくに花山天文台の施設を用いた市民や小中高生のための見学会や講演会を、京都市をはじめとする地域社会や芸術家の方々とも連携することで活性化し、天文台基金や「花山宇宙文化財団」を設立することによって、花山天文台の歴史的施設の保存とさらなる活用への道をつけられました。ここに柴田前台長の功績にたいする深い敬意と感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

さて、柴田前台長が実現した変革は、いずれも新しい時代のはじまりを意味しています。すなわち、それが大きいだけ、私たちは多くの宿題をいただいたとすることができます。せいめい望遠鏡は焦点面観測装置の拡充を図るとともに、全国共同利用を円滑に進め、先端的な天文学の成果を大いに創出することが求められています。宇宙物理学教室および国立天文台と協力しながら、確固とした運営をおこなっていくことが必要です。花山宇宙文化財団と附属天文台と京大理学研究科が如何にタッグを組んで花山天文台の維持発展を図っていくかも、今後の重要なテーマです。太陽観測については、今後スペースや海外望遠鏡との連携のなかで、飛騨天文台ならではの特徴ある観測を推進していくことが重要です。誠に微力ながらこれらの課題に1つずつ向き合い、次の時代へ繋げていくことが私の在任期間に課された責務であると強く感じるところです。関係の皆様にはどうぞご支援ご協力をよろしくお願い申し上げます。

令和2年(2020年)1月14日

台長 一本潔